

願成寺報

令和四年三月十日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎〇五三二・五二・九六〇一

春季彼岸・永代経のご案内

- コロナ禍ですが、感染対策をして勤めます。
 - 出入口と窓を開けて換気します
 - お参りの際はマスクの着用を願います
 - 堂内三〇名の人数制限をします
 - 事前にご連絡下されば席を用意します
 - お斎(昼食)は残念ですが中止します
 - 午前・午後共のお参りで
 - 昼食にお困りの方はご相談下さい
- 異例ですが、しっかりと勤めて参ります。



透明アクリル板を
設置します

「迷い」とは何か

ロボット掃除機のルンバはデタラメに動いて、それでも床を隈なく掃除します。デタラメは私が勝手に思うのであって、ルンバはセンサーと駆動輪を駆使して、予め定められた規則に従っています。迷走しているではありません。デタラメで迷っていると見えたのは、その規則を私が知らないだけでした。

目的地やそれに通じる道があって、それを見失ったり踏み外したりした状態が「迷い」なのでしょう。

もし、どうしても辿り着かなければならない目的地が、元々ないのだとしたら、「迷い」は迷いでなくなります。

一所懸命に精進し努力していても、必ず目標を達成できるとは限りません。けれど、その努力は無駄ではありません。

努力は成長を導きます。その成長とは、新たな自分が世界と出遇い直すことであり、発見に通じます。その発見は、私と世界に新たな地平をもたらすことになるでしょう。

私達は発見を予定することができず、それは常に不思議な出来事なのでしよう。その不思議の中に「仏のはたらき」を垣間見ます。

予定された道を、予定通りに歩んでいたら仏には遇えないのかも知れません。

念仏の教えは、仏に成る為の教えではなく、仏に遇う為の教えだと思っています。目標や目的地は、私を歩ませ成長させるために仮に在るもので、

それを見失ったり外しても、仏のはたらきの中であることに変わりません。迷いは発見に通じます。その発見は必ず、自他の境を越える力となるでしょう。

聖道門ノ人ハミナ 自力ノ心ヲムネトセリ

他力不思議ニイリヌレバ 義ナキヲ義トスト信知セリ

《正像末法和讃・親鸞聖人》

主 卍 十七日(水) 午後十時 餅つき・車取り会

三月 二十日(日) 午後一時半 法要のみ

二十一日(祝) 午前十時 法要・落語、法話

成田屋紫蝶師、住職

お斎(昼食)

午後一時

法要・落語、法話

成田屋紫蝶師、住職

● 阿弥陀経ノート⑤・正宗分・讚極樂・依報莊嚴II

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

また次に舍利弗、彼の国には常に種々の奇妙雑色の鳥あり。白鵲・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命の鳥なり。この諸の鳥、昼夜六時に和雅の音を出す。その音、五根・五力・七菩提分・八聖道分、是の如き等の法を演暢す。その土の衆生、この音を聞き已りて、皆悉く仏を念じ法を念じ僧を念ず。

舍利弗、汝この鳥は実にこれ罪報の所生なりと謂うこと勿れ。所以は何ん、彼の仏の国土には三悪趣なければなり。舍利弗、その仏の国土には尚三悪道の名なし。何に況んや実あらんや。この諸衆の鳥は、皆これ阿弥陀仏の法音を宣流せしめんと欲したまう変化の所作なり。舍利弗、彼の仏の国土には微風吹動し、諸の宝の行樹及び宝の羅網、微妙の音を出す。譬えば百千種の樂を同時に俱になすが如し。この音を聞く者は、皆自然に念仏・念法・念僧の心を生ず。舍利弗、その仏の国土には、是の如きの功德莊嚴を成就せり。

〈仏説阿弥陀経・書き下し〉

- ・五根五力 行者に備わっている覺りに資する徳目（信／精進／念／定／慧）
 - ・七菩提分 目指すべき覺りの姿（念／摂法／精進／喜／輕安／定／捨／覺支）
 - ・八聖道分 行者の実践すべき課題（正・見・思惟／語業／命／精進／念／定）
 - ・演暢 説いて広く伝えること
 - ・三悪趣 地獄／餓鬼／畜生の悪世界（三悪道）を想起し囚われる心
 - ・念仏法僧 例えば、耕すべき大地と鋤と仲間があることを慶ぶことか。
 - ・自然 何かに拘ったり囚われたり力んだりする障礙がない状態
- おのずから（自）しからしむ（然）ということ

・いのちとは

たとえ科学が進歩しても、クローン技術を進化させても、死んでしまった鳥を蘇らせることはできない。いのちはどこから来て宿り、暫く物語を紡いで、何処へか去っていく。何処は謎のままよい。もっと大切なことは、いのちが此処で「はたらき合う」という在り方をしているということだ。

野生の動植物は、悪趣の迷いなく、潔く一直線に、はたらき合ういのちを生きている。

・作用と受容

いのちが去ったあと、その痕跡は痛みとして世界に刻まれており、残された者の心を揺さぶる。この痛みが、世界と私をつなぐ絆なのだ。その絆こそが、物語が紡がれていく根本のテーマだといえる。

此処がどんな場所かを確かめる事。どんな物語を紡ごうとするか考える前に、他の物語を、どう読み解いていくかを大切にしよう。その気になれば、鳥や虫に念仏念法念僧と励まし合う声を聞くことができる。ありふれた奇跡を当たり前と思ってしまう落とし穴に気づけば、賑やかな世界に生まれていたと、出遇いを慶ぶ態度が開かれてくる。

「はたらき」と云い「絆」と呼ぶが、それは作用と受容の往復運動なのだと思う。受容の側からそれらを発見していくこと。自力で山を登っていくことよりも、他力の世界に降りてくることを大切にしたいと思う。

・仏とは出遇っていくもの

舍利弗は釈尊の一番弟子であり大阿羅漢であったが、それ故に釈尊に憧れ、釈尊でないことに焦っていた。覺りへと登っていく景色と、そこから降りてくる景色は全く違う。だんだん賑やかになっていく世界。舍利弗は、釈尊と出遇え、ここに在る慶びにつつまれて、ただ涙がこぼれた。

仏とは、それを目指すべき目標ではなく、常に私を照らして、私を目覚ましめる「はたらき」だったのだ。

創作・羅怙羅（ラゴラ）尊者の密行

生老病死の中で、生苦について様々な議論がある。が、もしラゴラに尋ねたならば、即座に「迷惑と答えたであろう。彼は生まれて来たことを恨んでいた。自分の存在を迷惑としか思えない彼に、どんな生き方があり得ただろうか。

幼い頃、「釈尊に捨てられた子」と噂されるのを聞いた。人々の好奇の眼が怖くて引きこもる様になった。城主の孫であり、人々の羨む境遇ではあったが、全く幸福ではなかった。

釈尊が城に逗留した時、ラゴラは弱々しい声で、父に出家の理由を訊ねた。釈尊は、「四門出遊の説話」「ラゴラが生まれたから出家できた事」「修行中もラゴラを忘れなかった事」などを語ったが、ラゴラには響かなかった。そのまま放つてもおけず、息子を精舎に連れて帰り、舍利弗に指導を任せて成長を期した。

ラゴラは精舎でも引きこもっていた。仲間は托鉢に出ないラゴラを訝ったが、ラゴラには托鉢こそ「迷惑」そのものと思えなかった。舍利弗は、仲間の不満を聞いても打つ手がなく、閉ざされたラゴラの窓を見上げて「彼は密行をしている」と誤魔化していた。

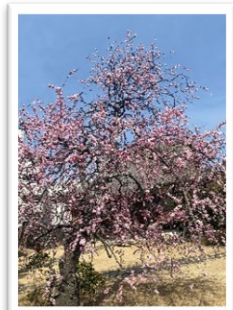
薄暗いラゴラの部屋の天井裏に小鳥が巣を作った。引きこもったラゴラは二つの迷惑を感じたが、追い払うのも可哀想だし面倒なので、知らぬふりを決め込んだ。まず、ひな鳥の音が喧しい。けれど夜は静かなので睡眠の邪魔にはならなかった。また、四六時中暗い部屋に、朝の訪れを告げる時の声にもなっていた。次に糞害である。天井の隙間から落ちた糞が、部屋の中で山を築いた。臭いし気持ち悪いので板で囲って見えないようにしていたが、ある時、その山から木の芽が出ていることに気がついた。それが自然の摂理なのだろう。

迷惑だけど、ただ迷惑じゃない。「迷惑」は受け止め方の迷いなのだ。囲いを壊して窓を開けた。眩しい光が木の芽を照らし、数羽の小鳥が巣立っていった。

ラゴラは、釈尊の様に、不都合にも「仏のはたらき」を想う阿羅漢になっていた。

< Wikipedia 等を参考にしましたがフィクションです >

少欲知足 もったいない



今、しだれ梅の老木が満開です。去年より多くの花がついています。

梅桃桜では花の付き方に違いがあるそうです。梅花には首がなく直接枝に咲くそうです。そんな風に観察すると面白いですね。

和顔愛語 ようこそ ようこそ

今年書いた年賀状です。

「私」を、「仏に不（あらず）」と書きました。大発見で、よくできたデザインと自負しています。特許を申請したいのですが、私が最初じゃないのかも…

恭敬三宝 おかげさま

昨年の春彼岸の様子です。コロナ中でしたが、もう少し人が集まるとよいな、と思っていました。大経に「兵戈無用（ひょうごむよう）」という言葉がでてきます。仏様の歩む処に争いはなく、武器は不要という意味です。

けれど、釈尊在世の北インドでも戦火が絶えませんでした。それどころか、釈迦族の城も隣国に滅ぼされています。釈尊にも、その軍隊を止めることは出来ませんでした。

何れも仏でない私の集まりである社会には、争いが絶えません。災害もやってきます。そのさなかでも語りうる救いとは何か。答えは、それぞれが見つけるしかありません。兵戈無用は、答えを探し合い、歩むための合言葉なのかと思います。



行事予定 令和四年春以降

八月の月例会の開催日を変更しました、ご注意下さい。

八月十五日(月) お盆・歓喜会(住職)

法要・法話で亡き人を偲びます
軽食・花火あり
午後六時

九月二十五日(日) 秋季彼岸・永代経法会(戸田恵信師)

お馴染みの先生の情熱的な法話です
お非時(昼食)あり
午前十時～午後一時

十二月三日(木祝) 本山納骨堂法会・団体参拝

本山へ貸切バスにて団体参拝します
午前六時半ごろ集合

十二月三日(土) 報恩講(戸田栄信・西川舜優師)

御開山聖人御恩に報いる法会です
お非時(昼食)あり
五日 午後一時半
六日 午前十時～午後一時半

四月十二月 月例会

毎月一日 午後二時～日時変更の場合があります、
寺までご確認下さい

八月は二日に
変更します
ご迷惑をお掛けします

奉賛法会 準備中 高田本山

令和五年 五月 二十一日～二十八日

- ・開山親鸞聖人御誕生850年
- ・立教開宗800年
- ・中興真慧上人500年忌
- ・聖徳太子1400年忌



弥陀のよび声『なもあみだぶつ』を聞いてゆこう

後記

○ 十四歳になる老犬は一日中寝てばかりで何のサービスもしてくれないけれど、私は長生きしてくれることを願っている。

もう何歳の頃だか忘れてしまったが、彼女は乳癌を患い、片側乳腺を全摘出する大手術を受けた。そのシヨリは妻が発見し、獣医により診断された。彼女に自覚症状はまだなかったのだと思う。

手術を待つ数日の間、私は彼女に何度も何度もぐいぐい聞かせていた。病気を治すための手術だぞ。痛いかも知れないが頑張れ。

キョトンとしたり、鼻を舐めたりしている彼女に、話の内容が分かったとは思えない。

手術の日、嫌がる彼女を制して獣医に預けた。彼女は聞き分けの良い性格で、いつものように過度な抵抗はしなかった。

数時間後、手術は無事終了し麻酔からも目覚めたと連絡が入り、まずはホッとした。経過観察のため、数日間の入院が予定されていた。

その間、私は彼女との信頼関係を心配していた。彼女は何処にも痛いところはなく元気だったのだ。それが病院で眠らされて、起きたら包帯グルグルで、痛いし動けないし。何をしてくれただと憤慨するのが普通だろう。指の二三本噛みちぎらないと気が済まない。飼主失格と烙印を押されて当たり前である。

再会の日、私に抱き渡された彼女は、包帯の胴体の後ろで、ユックリだったが精一杯の速さで尻尾を振った。私は泣きそうになっていた。

「この犬は、たとえ傷つけられても、他に居場所を探したりしないのだ。何があっても、私達と共に生きると決めているのだ。」

○ 「おまかせ」とはそういう事だと教えてくれた。だから彼女は私の師匠であり仏様だ。犬の十四歳は、人間の七十六歳に相当するらしい。年齢でも先輩となった師匠を、しっかりお世話させて頂こうと思っっている。師匠は、私の決意を知らずに今も、私の隣で無防備に寝息をたてている。